

住井すゑとその文学の里(五十五)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

犬田卯の願望

自著『日本農民文学史』と小説『フランス革命』翻訳刊行

昭和32年(1957年)7月21日、夕食後に卯が「今夜は楽に寝れそうかな」と言った途端、住井の腕の中に倒れ息を引き取った。享年66。同月28日に無宗教による葬儀が行われた。

子どもたちもそれぞれの生活の場に戻って行き、牛久沼のほとりの家は住井と長女かほる夫婦だけになり、住井は虚脱感に包まれた。この年の10月、犬田卯と住井すゑ共著『愛といのちと(副題・はだしの夫婦愛三十六年)』が大日本雄弁会講談社から刊行となった。

翌年の昭和33年(1958年)には、犬田卯が書き残した原稿『日本農民文学史』が農山漁村文化協会から発行された。

『日本農民文学史』が刊行されるまでには次のような紆余曲折があった。

昭和30年(1955年)夏、詩集『野良に叫ぶ』の詩人で農民運動家の渋谷定輔が、水戸まで来たついでと言つて、牛久沼のほとりの犬田家を訪ねて来た。

渋谷は、一時期、犬田と共に雑誌『農民』の編集に携わったこともあった。二人は、戦前の農民運動の困難な時代を懐かしく語り合い、現代の低調な農民運動に憤慨し、最後には自ちよう気味になつてしまった。

話の中で、犬田は自著『日本農民文学史』と翻訳物の『フランス革命(※)』だけは、何としても活字にしておきたいと話した。

それに対して、渋谷が『日本農民文学史』の刊行に尽力すること、を約束して犬田家を後にした。そのときの夫のうれしそうな顔

が、住井には忘れられない。

渋谷は『日本農民文学史』の原稿用紙の束をふろしきに包んで、次々に出版社と交渉したが、はかばかしくなく、犬田が『出版された日本農民文学史』を生前に手にすることはできなかった。

それは、正確を期すためにあまりにも引用文献が多く、専門家にはありがたいが、とても一般読者向けとは言い難いものであったからだ。

それが、昭和33年になると渋谷から、小田切秀雄法政大学教授の協力により農山漁村文化協会より発行できるという便りが届いた。それは、小田切によって引用文献が取捨選択された上に、巻末には、彼と南雲道雄の共同執筆による『日本近代農民文学史年表(作品一覧表)』が付され、220ページほどに整理されたからだ。

『日本農民文学史』は、固定した歴史観や政治姿勢にとらわれず、地味ながら日本の農民文学運動の必要性と存在理由が

勃興期の大正末期から昭和初期にかけて詳細に記述されていて、日本農民文学史の研究には欠かせない労作である。

『日本農民文学史』を刊行できて、住井すゑのほほには、夫に対する責任を一つ果たせたという安ど感でほほ笑みが浮かんだ。

一方、この年、昭和33年には、住井が『農民』に連載した『カラカランダ』『生きていた男』『匙』に筆を加え、まとめた『向い風』も発売になった。『向い風』は、敗戦後の農村で吹き付ける向かい風に一人大地に足を踏み下ろし、どこまでも自分の意志で生き抜く女性を描いて好評であった。

※8月1日号で紹介したとおり、今年の6月昭和堂より刊行。



↑犬田卯著『日本農民文学史』

昭和33年に農山漁村文化協会より刊行。日本の農民文学に関する百科事典に相当する。『農民文学』について犬田と小林多喜二(『蟹工船』の著者)の対決・論争などが網羅されている。―犬田家所蔵。